

[制作記録]

絵画的手法による光を内包した空間表現の実践

Practice of Spatial Expression Containing Light by a Pictorial Method

高橋 治希
TAKAHASHI Haruki

はじめに

絵画を鑑賞する時、額縁がない絵画や枠の印象が弱い絵画は、画面の内と外の世界が緩やかに相関し合う印象がある。また、絵の具を肉体に、筆の運びを呼吸に例えれば、室内を取り巻く光を帯びた絵画はその置かれた空間自体に生命感が満ちることもある。本制作記録はそうした生命感を帯びた空間表現についての制作記録である。具体的にはアンティークガラスにグリザイユ技法で焼き付けた伝統的なステンドグラスの制作と設置、および茶室において独自に制作した照明機材を用いながら、絵画的手法による空間表現の実践を通じた記録である。今回の記録を通じて、光を内包した絵画が像と物質性を空間に響かせることによってもたらせられる、生命感の表現について考察してみたい。

I 実践 1

城北病院におけるステンドグラスの制作

(平成31年4月～令和2年5月)

1 作品の概要

城北病院のエントランス新築に合わせたコミッションワークとして、ステンドグラスの制作を病院スタッフと健康友の会(病院友の会のメンバー)、高橋が協働で進めた。(図案に関してはメンバーの意見を聞きながら高橋が作成した。)半恒久的に建築物に設置されるものであるため、ステンドグラス制作会社である「クレアーレ熱海ゆがわら工房」の福井英夫氏に來沢していただき、建築物への安全な設

置方法の指導や協力を得ながら進めた。

2 制作過程

制作過程について画像とともに解説する。

① プラン・下図・ガラス型紙作成



fig.1
葉草14種類をモチーフとしたプランドローイングを作成。



fig.2
実際のガラスの大きさや線描としての鉛線の効果を考えながら、等倍の下図を作成する。



fig.3
プランに基づいて等倍の下図を作成した後、カーボン紙でケント紙に転写する。パターン鋏を用いて接合する鉛線の幅2mmを減らした大きさをガラスの型紙を作成する。

② ガラスカット

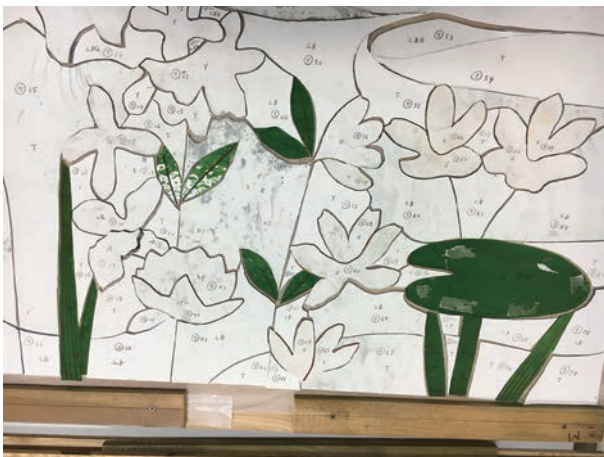


fig.4



fig.5



fig.6

型紙にはシートとガラス番号、および使用するガラスの色を記入する。(fig.4)

型紙に合わせてガラスカッターやプライヤー、卓上ルーター、バンドソー等を使用してガラスを切り出す。(fig.5,6)

③ 描画・焼成・組み立て



fig.7



fig.8

酸化鉄をワインビネガーで溶いて線描を行い630℃で5時間で焼成する。焼成後、線描に重ねるように酸化鉄を水で溶いてアラビアゴムをわずかに加えて中間トーンを作り再度630℃5時間で焼成する。



fig.9

別に用意しておいた等倍の下図に合わせて、幅8mmのH型鉛線を外枠にしてガラスを鉛線と半田で組み立てる。内側は絵画における線の効果を意識しながら4mmと5mmのH型鉛線を使い分ける。組み立て後、鉛線とガラスの間にブラックパテを詰め、篋でガラスに圧着させた後、おがくずでパネル全体を磨く。

④ 補強・設置下準備



fig.10



fig.11

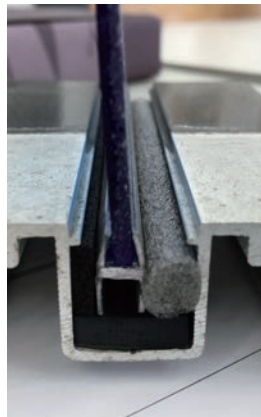


fig.12

鉛線やパテで繋いだガラスパネルは、日光の熱で湾曲に変形するため、真鍮もしくはステンレス棒で補強する必要がある。今回厚さ2mm幅8mmのステンレス棒をパネルに対して垂直に半田部分と重なる箇所を二八半田で接着した。(fig.10) また外壁ガラス面手前にスタンドグラス設置のために新たに鉄製のフレームを構造体として組み込んだ。(fig.11) 鉄フレームには発砲丸棒やゴム板を使いスタンドグラスを固定する。(fig.12 クレアール湯河原による模型)

⑤ 設置作業・ライトボックス



fig.13

鉄フレームにガラスパネルを固定する。1階部分はメンテナンスと管理上の課題からスタンドグラスの手前にさらに一枚透明ガラスを設置した。

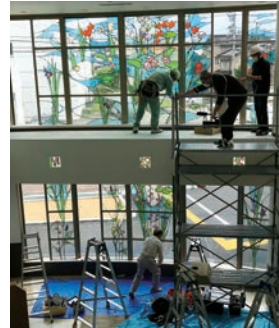


fig.14



fig.15

建物の構造上、スタンドグラスを1階と2階部分に分ける必要があることから、スタンドグラスと一体化を促すためにライトボックスをデザインし壁面に埋め込むことで、空間の繋がりを感じられるようにした。

⑥ 設置風景



fig.16



fig.17



ガラスパネル1枚の大きさは幅993mm×高さ1158mmから幅580mm×高さ619mmのものまで12種類あり、合計27枚のガラスパネルで構成されている。

fig. 18

3 作品意図

安堵と不安が交錯する病院エントランスにおいて、ガラスによる睡蓮の池と空が結びつき、さらに光を内包した薬草の光が足元を照らす。身体への願いや想い、束縛や執着、時には自身ではどうにもならない理不尽といったものを受け止める空間を考えた時、予想されない色彩（光）が何かと結びついて言葉にならない新たな形を形成する。形や状況は常に多彩な可能性を秘めていると感じ取れる空間を意図した。

II 実践2

《光の庭へ》

茶室「山宇亭」における絵画と光の応用

(令和2年6月～令和3年3月)

展示期間 3月26日～3月28日

1 作品の概要

水面に反射した光の波紋がもたらす有機的な照明の在り方を探求する中で、茶室の静謐な空間と共鳴する光と絵画の効果を試みた。

2 制作過程

制作過程について画像とともに解説する。

① プラン



fig. 19

室内の壁面に絵画と光の水紋が重なるプランを作成。光の水紋はカットライト、水紋発生装置、平凸レンズ2枚、鏡の4つを使い、光の形と鏡の傾き、それぞれの距離を調整して使用する。

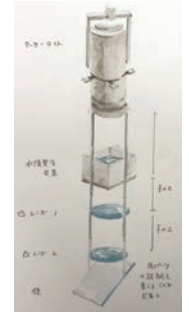


fig. 20

② 水紋発生設置



fig. 21

研究協力者の古川光氏のサポートを受けて、M5Atomというプロトタイピング向けのマイコンモジュールで、モーター制御用のモータードライバーを制御して、モーターの回転速度を調節する水紋発生装置を制作した。スプーン型のアクリルパーツがランダムなスピードと強さで水槽の水を叩くことで自然な波紋を形成する。



fig. 22



fig. 23



鑑賞者の死角に機材を設置し、水紋を絵画に投影した。(fig. 22,23) 絵画の裏には、ウォールウォッシャー照明と反射用のシートを配置し均等に絵画の表面に光が透けるようにした。

fig. 24

③ 展示風景



fig. 25



fig. 26



fig. 27
透明アクリルパネルにワトソン紙を水張りし、上から円形状に透明ウレタン樹脂を塗布することで、背面からの光を透過する支持体を水面に例えて設置した。その上から淡彩で水面に広がる菱等の水草や、かえるなどの生物を描き、さらに正面死角から投影された水紋と絵画を重ねて生命感ある空間の表出を試みた。

3 作品意図

茶室は障子を照らす柔らかな光と薄暗さの調和によって、空間に静かな広がりをもたらす。また光の移ろいを鈍らせる障子の効果は時間の滞留を感じさせ、その空間を悠久で深淵な世界へと変容させる。西洋におけるステンドグラスが自身の居場所と遙か彼方の光との狭間に神の世界を表出させるものなら、茶室の中で自身と光の狭間に自然現象を包括的に捉えた世界を表出させることは、多彩な自然現象に寄り添う日本的な内的精神性を映し出すと考えた。

今回の作品では水面や雨天を触覚的に捉え、その変容する姿を有機的に水彩で描いた。描写された事物はそれ自体が絵の具によって肉体を有し、筆致が生み出す呼吸によって生命となり、変化する光と影に彩られながら移ろいゆく。同時に、描かれる形態は多様な変化の可能性を予感させるものであり、変化は進化であり自身の身体の変化と移ろいゆく環境に精神が共鳴することの喜びを感じている。そうした世界観に溶け込んだ自分がここにいるという確信がもてる空間表現を試みている。

まとめ

以前から私の空間表現の参考の一つに、アールヌーボーにおける植物のメタモルフォーゼの装飾表現がある。植物の規則的でありながら、部分的には差異をもって建築空間を押し広げていく装飾性に、建築物でありながら生命感が遍満する空間に魅力を感じていた。また、西洋的な浪漫的な自然感情における美的想像力や深い精神的沈潜力の影響を受けつつ、アニミズム的で素朴な自然感情や仏教的な「空」の概念の入り混じりも意識してきた。

今回の研究制作は特に「空」の要素が感じられると考えている。歴史的に多彩な「空」の概念を簡潔に述べることは難しいが、実践した2つの作品では「空」を光と影、事象、生滅のあり様の変化を継続させる器と考え、現前の物がその物性を越えて多彩な一面を鑑賞者に語り掛けるアプローチを試みた。例えば右目と左目に映る像が違う像でありながら一つの像を作り出すように、絵画における2つの側面「物質」と「像」の2つの認識が融合し、その先で個々の「像」や「物質」が別の「像」や「物質」に変化したり統合されたりするような移ろう空間表現を模索している。

また光によって生命感の印象が大きく変わる事にも着目している。以前、照明デザイナーの藤原工氏から「光によって全ての生命は生かされている。そのことが多くの宗教で光が扱われていることにも繋がっていると考えられる」と聞かされたことがある。表現におけるイメージを「光と自身の狭間にある生命的な広がりを持ちながら自身と融合する感情」と捉え、仏教における草木成仏や石など無機質な環境すらも成仏する思想とも重ね合わせた心情を考えた。偶然にも今回の制作は病院の待合室、茶室の両方共鑑賞者は内向きな精神状態になりやすい空間であったことは、その内向きの中に生命感を表出させることに繋がったのではないかと考えている。

今後も自然感情を起点とした生命感の空間表現を探求していく予定である。眼前の事物の変化や、他物と入れ替わる印象を「空」の顕在化の一つと捉え、

自身も「空」に内包され変化し続けていること、さらに自身の生命感は自身を越えたところにあるという衝動を、これまでのような陶磁器での表現に加え、絵画や光の表情等を多彩に組み合わせて研究していきたいと考えている。

*本制作記録は令和元年度「コンディショナルアートにおけるステンドグラスからの表現研究」および令和2年度「LED 展示照明の授業実践と自然現象を想起させる照明フィルターの研究」の成果（の一部）である。

（たかはし・はるき

油画／絵画 インスタレーション）

（2021年11月5日 受理）

参考文献

- ・大西克礼『自然感情の美学 大西克礼美学コレクション2』書肆心水、2013年
- ・末木文美士『草木成仏の思想』サンガ文庫、2015年